校長室からこんにちは！

No. 6
２月２７日
発行者　中田 禎二

「教師」…ドーハで思う

「いいよ～」「意味分からん！」何のことと思われるでしょうが，これは私と可愛い３年生の子どもたちとの算数の時間の遣り取りのひとコマです。もちろん，楽しい雰囲気づくりの会話の一つなのですが，２学期中途から毎日１時間算数を担当するようになって，こんな冗談を言い合える間柄になってきました。子どもの純真な心に触れて，今では実のところ〇年前の担任時代に戻りたいなあとの気持ちもしばしば起こりますが，いやいや，若い先生たちのエネルギーに叶うはずはない。お爺ちゃんの歳に近い者が何をかいわんやと心を静めております。

子どもにとって，担任の先生は，文部科学省，教育委委員会そのものだと思うのです。つまり，それだけ重要だということです。でも若い頃はそんなことなどいっさい考えず，ただひたすら…雪が降り積もった翌日は子どもたちと裸足で雪の積もった運動場を走ったり，フジテレビのタケチャンマンを真似て，プールで懺悔と称して子どもから水をかぶせられたり，寒い時期には教室にあるストーブで休憩時間に餅やスルメを焼いて子ども達と食べていたのを先輩の先生に見つかり叱られ…，子どもたちとの授業以外の思い出がたくさんあります。古き良き時代だったのかもしれません。いえ，時が経過しようとも，担任の先生は子どもにとって変わらない大きな存在だと思うのです。教育の基本だと思うのです。但し，私の場合，新年度の担任発表時には子どもが一瞬フリーズするぐらい怖い先生ベスト３に入っていましたが。

中東のカタールにまでやって来てこんな思い出に浸ることができるのも，ドーハに縁をいただき，明るく素直な子どもたちに出会い，そして保護者の皆さんを始め多くの方の支援があればこそと，今，何と自分は恵まれているのだろうと感謝の気持ちに包まれています。

ドーハ日本人学校の特色はと問われれば，「当たり前のことをコツコツ積み重ねる」職人がひたすら精魂を傾けて仕事に臨むようなものだと私は答えます。当たり前のこととは「豊かな心や健やかな身体を培い，読み書き計算の力を付け，日本の伝統文化を身に付け，そして，異国の文化を理解すること」ととらえています。そして，これが日本の教育の「不易」の姿であり，学校が，大人が，子どもたちに将来に亘って文化を伝えて行く営みであると考えています。

校長写真館

～ドーハ日本人学校のお薦めの景色～

１．校舎正面の「木々と花達」
２．山や川やお団子ができる「校舎裏の砂場」
３．芝生とランニング周遊コース
４．かかとの揃った「児童・生徒の靴箱」
５．畳のある知の空間「図書室」
６．活力溢れる「二つのホール」

耳にタコだとは存じますが，「何も無いのではありません。気付こうとしないだけなのです。」

ＪＳＤの空間は私のカタールでの実家です。

ちょっとお耳を…

年末から年始にかけて長女が，１月中旬には次女が初めてカタールに来た。ドーハ赴任時から若い二人にはぜひ中東に触れてほしかったが，やっと実現した。二人とも数日間の滞在だったが，私にとって最大の喜びは観光でも買い物でもレストランの食事でもない。久しぶりに親子で取りとめのない話ができたこと。一緒に笑ったこと・・・当たり前の日常だった。

娘達が帰りまたいつもの生活に戻ったとき家内に言った。「若い時代に家族で来たかった」と。